

藩鑑

紀伊殿

八



内閣文庫	
番號	和 34682
冊數	278 (10)
函號	159 1

内閣文庫	
三五九 五二架	三八冊
三四八 八二號	和書



藩鑑卷之十目錄

紀伊殿

權大納言源頼宣卿

藩鑑卷之十

紀伊殿

源頼宣卿



一 明暦二年丁酉三月十八日より江戸

大火事十九日清巻上

叢有院様より西の丸へ本移成され

別本蔵鎌本何本本蔵本本上中本等

綿常の通よめて尾張様へ出入りも
申羽言殿、此草羽織たりつけふて
此申門の内小鉢札も此座かされ
此覆曹も爰よ入此申側よ履せ申こ
いらめしき此やうすの祈頼宣卿
此ふ中此急り綿よめて出入り此の
外よ見えりる尾張様もも
公方様此裁謙此羽成さるゝとて

頼宣君此同道よめて此此の別尾張
殿の此玄園よ此ふりOR納九十部原
此河跡を巨し此ふ中此袖をぬくせ
られ此ハトも草羽織裁付を巨此
入此も尾張様此同道尾張様もまた
事とい思巨さる此せうすふて是ハ
如何成事ふやと此袋つしき此有
さうまよめて此頼宣君此天守此事

此て最早久しくありぬる水五並
成さるへき時長あり冬よも昔一
かりすと水物積みて水門へ水入ぬ
とんと成されぬよ水堰為よち疾
弛の水物頭堅め水通を押し下さん
とのやうすに見えぬよまき水先へ
系ぬ原田市十郎牧野傳友清系り
やうまうりかりすとて大音よ

此より成さる水氣又あつりを拂て
すまきまかりしふ公儀の水物元
も其水勢ひも恐れて皆畏り一
言り者あつりりる市十郎傳友清
水先へ系り水群悪友いこれあく
ゆへとも水物元水兩版を通し
中まきまき群を早水さうり大音
めて水吐り水勢ひを必く水威

光を此見せ成され此通り成さる

今此謀ありけり 紀別頼宣卿言の録
南龍君達事

一 酉の年江戸大火乃初紀伴大納言
殿乃此願今より米私五艘首岸
せり米言子八百石あり紀別後
人は是を脱ひ頼宣卿へ中よりるハ
此米私着意仕り此のやう乃儀
常ハ此聞よ達し中事よめてハ

これあく此へとも共今の節小此言
伺奉り此此年取小兵糧此事のけ
乃中も是あく此言以度の水米
ハ此拂よ仕へく此のこやと中よる
頼宣卿聞し言て其私ハ江戸浦へ
入ルヤ早く沖へ押出し掛並中
へしと水中取有て云ふありける
我等在新より米私みく着意

いしゆみふふのしゆめてゆへともひ
節の儀よゆる水用小たふ中度水
と水老中月番へ作遣されし聞小
達しりるり流用よひこれあきしよ
し作おされたるかへさうりか年
小取ゆやう小作おされりり時分
抽の儀あれは世よは聞えといひ
遠きおもんちりりをかある者

ハ感しけるとあり 抜合雜記
南形君達中

一さる軍者の存案よめて水家中もの
陣羽織の事や其者の好よめて淺
美木綿の袖あり羽織出来す殊
乃外見若くく中く着用成りき
やうす田尾菊右衛門淡輪新兵衛其
川権太郎あともゆると有るゆ聞よ
達し先其通しゆして並へ

紀別家中又者羽織のやう成として
何事にも育んじき敵方より似せ
て着用は思ふと入らるときこら
方にも被羽織を用よつて敵より
の給者を選出する一つの術の
本も成あり思ふ大軍も對の
羽織を着せぬものあり五光丸
近真田保巨物語ありと注意あり

以後又者の羽織次第も公用小成る
とあり

紀別頼宣の言はれ
南紀居事

一 本二男及京大吏頼純主へ天下の名物
大坂肩衝寧一山の二羽物本掛物其
外衣具も一行中への衣乃曹を
たしめ名物とも多し本儀成され
後邊着使も並綱中よら
権現様より進せられ天下の名物

とも本猫男へ本儀成されへくる事と
世よもも中ゆりか^の批判と存本
本庶子小本重寶本持氏具を造
られぬの拾別茶湯道具ハ本出
成さる中し^く本容も本座有へく
ぬ旨本任用と中^る類宣君本笑
成された系小身なれハ以来中納
云徹金張り合り云心^りめて是

あるへくぬこのとき只新望も成難
し^く以^て存物乃道具を質も入金張
りぬも^く道具惣順家へ戻りた
系^の前のたりも成るへ^くと思ひ
不相意の道具なれとも^も儀と作
られぬ^{目上}

一 本約束もて小笠原右近將監忠政
より壺胡篋矢篋^なと箱も入封^下

して進上せりし使者ハ涙多見其方
邊つとつふ者あり早天ハ水云園ハ
系ハ當番の番頭源美源又市出
命ハ大納言殿夜前長座被され未
ニ休居りれハ目覚めて水口上
聞ハ道具見せ申へくハ先ハ使
ハ水詢り申として去方邊ハを詢し其
日四つ時合ハ源又市其辰奥乃

番頭茂兵衛を以達し彼道具ハ清
取並しと申ふる茂兵衛表使の女
中を召申上りハ右近殿使者を道
しハと作出さるハ右近殿源美
源又市ハ源又市ハ先ハ申上り
通使者ハ今朝詢り申と申茂兵衛
申し女中ハ其辰申上りハ水意ハ右
近殿使者を書院へ通し申と作り

る源又平不思議も思ひ度く申す
通し使者ハ今別度り申すと申す
御意も使者を通し申すと作出
さる源又平ハ茂兵衛取次の仕方
悪しきなりと既し年論する也
小傍よ布施た又右邊の尉重張居け
るの目を睡し思案し源又平よ向
てさうしし申念入申思案も申す

ものうか元史の及事よめてあり其
子細ハ右道後秘密の道具をれハ使
者を呼付其封戸を申切成さる也
たのよ使者を通し申すとの數度ハ
御意早く右道後ハ使者を呼も遣
し御しと申源又平肝を潰し早
道の者を遣し早く申すハ源又平
と右邊の早く系も申す其後申すハ

系書院へ水通へ水對面成され使者
の目前よて封平水切其封を使者
よ水渡へさうて道具出へ覽成され又
箱よ納使者出改へ成され水皆く
殿様乃水言紫我等如きの元史
乃及知よてあへと感へるる^{同上}
一村よ彦右衛門よ惣軍の武者を以作
付られぬよへ江戸へ開え水城申よて

水旗本歴々集り紀伊國殿よへ新
系乃村上彦右衛門よ惣の魔を中
付ぬよへ水藩代古系よ軍功の者
多きよへ河の渡り奉公人彦右衛門
よ武者を以中付よて公底へ知れ
中ぬ智恵ハあき水人ありと評判
せよを久世よ友衛門取をふりい
つや谷のう筒ハ天地の遠あり誓

惠ありて

公方家へ不仕付と謂へし其子細
此藩代古系乃勇士を為並新系
の村上彦右衛門惣庵を此中付六
大成謀畧もめて天中の諸浪人を引
付き自辰あり紀列もて古系新
系を撰ますし徳者かれは夫後よ此中
付ても未頼もしきまありと諸

浪人の思付も有りことありきてもく
権現様の此目鏡の此色子種ありて
油引あらぬ人ありと中けれ八座
皆心と感しりるすし

一國主の身もて二つ兄弟の分もて
もむさこと料理を食し湯茶も飲
ひて兄弟の中もて毒を相も有
必く其用公等一あり兄と弟と母

別ありたるとも毒の兒よ毒害の公
いふゆれとも毒の母は新為よて
毒害する事あり初晩の食も
其用公肝要あり毒の方へ振也か
ともありてい猶もく氣をふへきか
皇女の貴族ともよ拙きものよて後
の珍味もあく毒を同ものありは
かよ國主い中に及らす見毒の

方よてもむきこと飲食すすへる
火將り火中のかけありと
度くの毒意あり目よ

一 類宣君取智神速の火世よ稀少
て人の及ばざる事のみ私身
竹本丹後方へ出入終日酒宴の如
能を竹本つ太史よ作付らる是い
金春大史り子よて天王寺聖徳太子

の役者名ハ庄太史とすこれハ東水
を作付られぬハ此役者ともこの
庄太史ハ河原ものありや
ハ此免成されぬハとてちやさす此慰
乃遠礼ハ成りるを此圍成されい
ふハを役者とも中此東水のちや
ハを了ハハ庄太史ハ東水を作
ぬハ両方面ハ此役者ともせよと作

付られ事深かりき此元年依竹義
處の家老戸村十太史を巨太坂水陣
今福合戦乃初二の日の防戦の時
戸村一番巻を
沸新録の水感状ハ青江並次の水
腰物洋願其とき巻相手の大坂方
を此尋ありハを十太史ハを
くちりと見届ヤヤハハハ

其とき頼宣君が管派及兵衛より北向
ひ光年我家へ抱たりし山中友太
史赤堀又序兵衛今福もて手管
合たる事ありし十六史徳相より
此業知てあるべしと作りしとき
戸村より私徳相より器具は段の
揚羽の蝶の衣立物より曹もて美徳
の腰小旗より糸幣を持ぬものよて

此と申しよるこのとき戸村より相より本
村長門も組乃物取彼久洞藏人と
よふものあり本一代乃内かやうの水
取幣勝くの時へりし目上

一 上野の台花乃借中水見露ル其
前よ水旗本元水見且水吸物の支
度仕の中其容退出其跡へ上野元
系られ水吸物と有時よ初めよ

佃し魚類の水汲物をおす類宣
君蓋も水取成され水へ魚類あり
作られぬ、庭前小葺出生水も料
理よ致しぬありか若しひりすと
醫師もヤルへとも食ぬる中入さる
事そ早く小遣とも其汲物取替
ふへと作られ皆引ぬて踊り精
進の水汲物おす、海も其成持ぬ

事とつへとも及ふ所よありす
同上

一 江戸赤坂の屋敷へ玉川の水を埋
植よめて取らせりるに思ふやうに
りす、奈河汲人あくる、筒ふま
りれども、鬼角水かよく、まらす類
宣卿水開成され水好よめて植を曲
りこよめて除して、續らせりれい水

映よく事なり水 南総巻遺事

一水老申方より水城附へ申されぬハ
紀別換ぬハ

権現様より水降順虚堂の墨蹟水
新持のより降見仕度と新證是
あるよあつき申度教へ水拍清あり
申ふよりへ二浦長門も為時遠下
むりもさうて水老申水教勢起へ入

給ふ頼宣君水出水書院まて水出
ふされぬハ虚堂墨蹟ハ箱より出
一遠棚ぬあり頼宣君水教勢成さ
れ水道具車引鴨居音兵衛千宗
依を巨何とて墨蹟ハ懸ぬそと
水此り成さる音兵衛宗依も取遠
外の水掛物水教勢起へ懸たれハ
今更爲方あり頼宣君吊ち渡

邊着候も此使もて此老申へ申出
りる其報ハ沛新望の墨蹟ハ
権現様此手自拜願仕此ハ初より
惣此申勿辨あ〜何も此入此後
大納云傲自身惣られ此と来
哉申さす此何も此出素床よ被此
及如何と存られ外の掛物惣葉
共今大納云傲自身惣らる〜と

着候も申達此ハ此老申一同此
か子弟と申され此宗依床の掛
物もつす頼宣君友よ墨蹟右よ
矢管竹此持沛惣成され此歌智
發明古今云頼乃事と感〜

紀州頼宣御言の録
南龍君遠事

一 頼宣君此幼年より此根力賜此一
度沛覽成され此入此ハ五年十年

二十一年小ても涉費成され此紀別
小ても他國よても裁人といふ教か
しきし同者志のひり事を徳小見
細成され路次もても子人の中に
ても小見とこの果して涉國を何
ふ者あり又女中を系大坂より
巨抱りもしよ諸大名へ奉公よりて
服出たるを撰て巨並れ國この

秘評小尋ふされ此二六時中此公を
耐られ一度

公方へ大切の此奉公を成され度と
此忠節を励まれんとの忠義の
此公掛懐るよりありきと

頼宣乃此度へ此歩外此公を及里
の節不時も若者ともこの言を此
賢せんといふ急よ巨も小依く



とりあへずあまたしく強陰し
めす洞もあく急き飛出して行仕
まはり或時側出たの者まで支
死ことより中い若き者ともあり
水覽しぬく前口よりも何卒作
出されて相觸用意しことせり度
し急し作付らるるにつき何れも
弓張水洞も是あくぬも入渉前まで

的前仕損しぬ水序を以て執成をと
頼みりり以む子頼宣に聞せられ
て笑らせられ急よ云付し新よ
あれ石とあれはよきを肝心の場
よてふ中と庭より呼ぶやうか
にぐいあし孫の外急成儀よて呼
吸の落付しよよていあきをそと作せ
られりり被ふつそりしき場よ武士

たる者ハ平常心ノ薫臭シテ油引
あるまじき事あり此公底育て不
時よりをも見させられりるあり

授命雜記

一宮城久遠門ハ九節太郎と申せし時
より秩胞を飛隼ノ筆勅の如を
得智才技群ノ器量を水賢ノ筆
引殿ノ作付られ此其上水工史を

以て碁盤乃圖と申繪巻を成され
又其七及八及ノ彩及あり此願國納
米の趣言を卷け免を四つ又つ六
七つと水極め水家中形引技持切
米等二江戸水系勅ノ申入用等三
在江戸申の入用等四新々水普清
他事等又戎具馬具入用等六水
臺新入用等七水響野水徳水篇り

尋野のやうのふくを分つゝ水普清
水化事有へきこきハ外乃入用を
減し又水加増水金中されの年ハ
又水普清水化しを止めあへきこ
あへきを入合せ融通せしめ水勝
年よ水つまりぬり曾てあへき水一
代水自由よ水産ぬり水又吏の基
盤積もあへき

紀州頼宣の云々録
南勢若達

ハ大猷院殿重て水不例の衣頼宣卿出裁
豫伺ひとして水系勤の節大井川
水まさりて渡りたやすひらすと
ソハとも急き給ふ後引あれハ水侍
成されのこゝ大勢乃川截もて渡り
給ふ頼宣々宣ふハ川向よ立並た
る馬戸ハ急人教回勢もて一人も残
らハ渡りふりぬを見こけ引中

予も史までい急度立をくへとの
中報あり仍て大勢の人教強動す
るる予かく恙かく川を截すを急
き給ふも水止りかく先へ通し給
へども馬車動りさるも水諸人渡り
ふりぬちて扱へ給ふともおもひ周章
さづく事かく怪我かく渡りらる
後初のやうある事あれども至

極成水軍法と人志を感しけり。

あり 校合雜記

一 大猷院存跡他界の初類宣々態
野平王の裏へ誓詞記清文よて
當么方存へ對し常り不忠不義
成さるる中ありきこの水文云あり水各
平水血判成され思漆の箱へ出納の
日光水寶殿へ竊よ跡納並成され

此推も知る者あり万治二年の春
日光社僧松平伴直書へ奉りて先奉
紀伊國旗何やうし本實殿へ本納並
成されぬとふ志物語せしるふと聞
達し此老申本相談よめて江戸へ取寄
箱より取寄し御覽此紙
公方様へ對し奉り不忠成さるま
しきとの乳清文ありりれハ

公方様ハ中し及びし此老申も頼宣
たかやうの深き水が成を本紙の中
氣遣仕此水忠節乃水公を感し
奉り其奉在江戸十年目本政國乃
水喉を造せられぬと云
紀伊頼宣の云々
南勢君達の中
一十年治本政國の翌年十月云猪水
祝儀束くまて本身自解を取リ下
されりも小具夜駈しき人教あり

水仕舞成さし奥へ入せられぬときこ
浦長門も當時彼野良安水破して
中りるハ今夜いさうていへ大勢よめて
水退屈成さるへく水氣長し隙中へ
いと恐ろしく氣遣仕水と中りる水
意ふハ侍もハ此上申し又増倍多
くても退屈いせぬあり大将ハ人教よ
ハ胞ぬものありと作りるとあり目上

一平生諸人をあつりしを等しよ
思召たこへみ節句期望仕ぬも先
水通習り人を思し水廣河其外
の水産敷大勢仕元満たる末産
り人の陰よ誰く積長水と有る
を水聞さうて水出成さし舞よ水封
款其時分相意の水意あり末産乃
人陰よ積たる昔の危を水吹ま

の注意ふより末この案まで自見
仕るを悦び人陰よ居ても敵よハ
徳也賢成さると公將仕仕日めハ
貴族群集をふしりり目上

一安友花弾も虫治ハ父常口虫次よ
習ふき名長あり病死して其子
子福丸初少よてありしり成長
し仕並をよ見習ふことある

初水道習の西くを巨子福の素性ハ
一己の大將もも成國家の仕並も
父祖の跡を續へき者と世よよて
もみ汰するり何と申ルと水尋あり
何も子福生付徳一廉水用よまへき
者と取み汰仕りルと申ふる其いき
頼宣卿水手を命され天を水降る
我冥鑒よ叶ひ子福さやうよ生え

つうん家老の子とも思ふてハ吾
年足矣たるとおあし子福ヲ独生
たるハ我仕合ありと水悦ひあり
しとそ^{目上}

一 万治二年四月松平出羽守在政水
換授もて彼竹義慮の家老戸村
十太史を水申屋敷へ召喚れ水前小
て大坂冬水陣今福にめて彼竹

義宣と水村長門守重成後友又兵衛
年房と一戦の次第を水聞

権規様より下され水感状を詳見
成され水尋成され水繪志の書付
を水書院乃上座もて札の上もて
水詳見成され水次第小日も著し
りり水座中くりくあるおへ繪志
の見え兼水申へ水極道へ繪志を水

一明りを請て書舟を讀せ十太史
物語の上の相解の十太史極類乃
未産へ志より類宣々も敷居より
二首より上産へ志より由て
此産の最早此暇の上選出仕由と
中上の沛意よめ老人の長産選
履仕へく此管派及兵衛芦川甚又
兵衛よ作りれ此の十太史へ酒を勧め

此へさく此感状を此房へ成され此
とき此書院の去中初の此産敷も此
感状是あり只今の祈もてハ二首
より河り此小産此近習皆十太史後
小思り居て物語を聞居ゆゆ一彼此
感状を取次人あり松中友も元一
人此腰物を持って張在由是よ依て序
彼美物張立此感状を沛前へ是よ此

十太史へ水戸へ成されぬを取次中へ
と存水前通く長り孫在る感状を水
手よ持せられあふつらよ十太史親り
又成實を子孫よ譲る者ハ世よ多し
のやうの水感状を取りて子孫よ譲り
家乃實とさす人ハ申々稀あるもの
あり其方ハ子孫の冥加の士ありと
再三作りぬ申よ彼賜う旅を度

水質成されぬハ彼賜かよいつくと思
ひ立退つらりの抄戸の姓ハ世々を
つき畏り居ぬ頼宣ハ菅派九兵衛を
戸水感状を水渡十太史へ水戸成
されぬさうて翌朝ハ絶又節友達ハ希
彼又在るの形りよめて今彼美彼賜を
尊水意として中渡されぬ以て彼行
家老戸村十太史戸水感状水相見

後水戸一成さるる一可時分初め水戸見
の産より水前まで水感状を取次是
上水戸より思戸水前より十太史へ
水戸一成されぬ最の取次も若年
の者不相懇小思戸されぬ
兩所所縁水感状もてぬ一審取より
以下の者もてハ如何と思戸ぬ也其
方面を度度水覧成されぬハ公府

立退ぬ也一管派九兵衛を巨れ水感状
水渡一十太史へ水返一不能水満足
成されぬ向後万中分を附諸事
小菅油所あり水奉公仕へくぬ名
作出されぬ口の水褒美と一して水戸
の水致付時版もされり南松君遠中
一或とき水登城の初山中化右邊の水目
見よ飛出ぬを水通りのけよ山中

を巨きれ水常の水言葉と存し其を
下け浄礼仕ぬへ式臺より又水味
系ぬへと水意を水小燈中次ぬ右邊の
小をり追付ぬへとも水駕籠よ巨水門
の方へ水虫よつき洗もて水白洲へ飛
り水駕籠へ追付ぬへ他右邊の
のけつきぬを浄賢成され口をさ
して系れと作りれぬ他右邊の口

を指清水谷もて追付鞠町二町目ま
て水駕籠よ附系ぬ史より水眼より
水屋敷へ油りぬ着待ぬ人水附水房へ
成されぬのやう小水分付ぬ甲へ諸人
公意を深し其後他右邊のぬ水尋
ぬる旨至蔵田常去祇園系礼見物
棧敷の向し尾張水戸吾等棧敷取
見物せしよ依る本梅公室約長兵衛

常六の依りて近頃せし他法中に見るやあり孫よ十八九歳の小僧の友其刀を持た友の後よ積たりの刀持せりさうちく見り有り後くまても尾張殿とハヤ出たりとの本意なり

紀州頼宣々々の孫
南龍君達也

一 紀州頼宣卿本内澄よめて金子本用
の節よハ本掛現より本判を本取

出し本鼻紙よ本を金子何れと清
取く糸れと本例よ一作付られ金奉
引のものよ右の本判を渡して本
金清取りて清前へする事あり或
とき夜更して急よ本金本用ありとて
本判を遣はされよ金を引本判を
つくと見てそのもの本判よてあく
本取金子さうのつくとぬありつ

もの本判を本中りり給りぬとす
本例元本判を見て成ると本判はつ
もの本判あるよしあるやとす
事うか本中えも詳見つしぬ
金子渡されぬと違て中とす渡
きす時刻うつる尹へ去とす
其とき頼宣研本押成されぬ本判
を本覧し減小其もの中す通り

あつひたるはとて本押成し中され
りも其とき役人是こと頂戴して
金子を渡しりり判鑑と第一
人の判あとい役人たるものよく目
下を覺ゆへきりあり頼宣は彼
者を本ためしのためは成されも
まうりのしりぬの後よとす
られしあり

校合雜記

一寛文年中よ遠江灘よめて頼宣の
の本私を巻上げ茶麿を思すく如
く海上荒りるよ平生の本顔色よ
て私其外の志ひたる者を救ひ
給ふまゝ人阿のまことハ見えさ
せ給はずとぞ

改訂太平記
物語



